



昭和42年(1967年)

7月号(No. 265)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

紀行	蓮華, 小谷, 蒲原温泉	成瀬岩雄… 2
雨乞登山		藤島 玄… 4
行事	ウェストン祭	日高信六郎… 1
	熊の肉とスキーの会	… 3
	渡辺公平・関口周也	
	蔵王連山山開き	山崎安治… 5
	木暮碑前懇親会	山村正光… 11
主な海外登山(1967年) - V		… 4
海外情報		
	ソ連の女流アルピニスト 袋 一平… 2	
	Yerupaja 初登への疑問(8),	
	アンデス通信(東京白後会, 9)	
会員通信		… 6~8
	日米合同アラスカ隊(津田周二, 藤田博), 女性ボリビア親善隊, 台湾の近況(滝本幸夫), エルブールズ隊帰国, ボルネオへ(神原達), アフリカより戻る(岡部紀正)	
図書紹介	地図の空白部(山崎安治), The Himalayas(松崎中正)	… 10
会務報告(12)		… 14
会務異動(14)		
ルーム基金募金状況について		… 14

ウェストン祭

日高信六郎

第二十一回ウェストン祭は六月三日、四日の両日上高地で開かれた。

三日の土曜日、朝、島々宿の橋畔に集ったのは五十人あまり。一足さきに先頭を切った横名蒼会員、佐藤久一朗会員、これにつづいた私などは、二俣のあたりでアッサリ先頭をゆずって、上高地についたときはずい分おくられてしまった。

一行はむかし変らぬ桂の巨木のかげ、なつかしいイワナ止小屋で談笑のうちに弁当をたべた。徳本峠からの穂高は頭を雲にかくしていたが、梓川の畔りに下り立つと、今年は季節が早く、小梨の花が満開。思いがけない供応に喜んだ。

四日午前の碑前祭は賑やかだっ

た。晴れた空のもと、ほほえむウェストン師のレリーフの前に立ち霞沢の峻峰を仰ぐ。尾崎喜八さんが病気で来られず、いつものように脱稿したばかりの自作詩の朗読と、しみじみとしたお話を聞くことの出来なかったのは淋しい極みであった。

碑前では高山実行委員長、安曇村助役、松本市副議長の挨拶に次いで、横さんと私が挨拶し、田中薫会員は、戦前スイスのツーン湖畔の宿に静養中のウェストン翁を訪ねたとき、翁は氏の請いをいれ、日本の友人に見てもらいために、特に登山姿に改めて十六ミリの収まったが、その後間もなく逝去されたので、図らず最後のすがたを留めることが出来た次第を述べて一同の興味をわかせた。

供花が終って、塚本新支部長の挨拶があり、最後に信濃支部による高山前支部長と小里総務への記

念品贈呈が行なわれた。

高山さんが長い間信濃支部長として支部の世話に骨を折り、本会のために尽し、毎年のウェストン祭には支部員と共に力を傾け、漸次各方面の理解と協賛を得て今日の盛況を来たされたことは、感謝に堪えない。

この日は東京から石原、沼倉氏等大ぜいのほか、静岡や関西支部からも参加者があり、蒲田の名案内人松井憲三老も馳せ参じて旧知の横さんと肩を並べて談笑するほほえましい光景も見られた。

午後は小梨平のセントラル・ロッジで講演会。足立源一郎さんは、元来海が好きだった若年の頃、山に眼をむけるようになった転機を回顧を語り、横さんは登山者の心構えを説いて自然の愛護を力説し、私は山をじぶんの身うちにはぐくむ気持ちを話した。

ウェストン祭には珍らしいお天

気も、昼すぎには崩れて雨をふらしたが、人々はあざやかな新緑と満開の小梨をたえて、梓川の畔をさまよった。

白沢あたりの山くずれ復旧工事のため梓川の西がわに殺風景なトラック通路が開かれて、明神池までの静かな林中の小径がなくなり、今まで眠だたぬ存在であった山岳会の山荘も路傍になってしまった。上高地はほとんど「開けて」行く。こよなくこの自然を愛したウェストン師のことを想うたびにわびしい思いがするのである。

「山岳」の世界的な重要性!!

西ドイツの Karl Gross という人から、来年、「Oberfränkische Alpen-Expedition, 1968」という隊が、ボリビアのアポロマンバ山群に行くことになった。ついでには「山岳」一九六二年所載の貴殿の報告を読んだが、尚、悉しいことをお教え願いたい、という手紙が来た。愉快である。(吉沢)

お知らせ

新ルーム披露パーティ

七月十四日に予定しておりました、新ルームの披露パーティは、都合により来る九月八日(金)に延期いたします。詳細は次号で発表します。

一水懇親会変更のお知らせ

七月の一水懇親会は、七月五日五時から九時まで新ルームで開催されましたが、月はじめの週は各委員会などが重なって不都合があるので、八月からは第二水曜日の同時刻に変更します。従って会の名称も「二水懇親会」と呼ぶこととなります。

会合は、月一回では不足と思いますので、この機会を大いに活用して会員同志の親睦を深められるよう、ご案内いたします。

婦人懇談会からのお知らせ

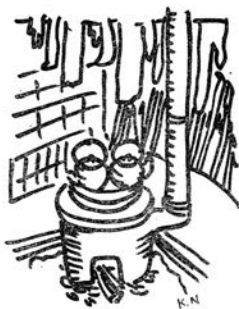
婦人懇談会は、毎月第三水曜日に定例集會を開くことに決定しました。七月十九日は今後の運営方針について話し合います。男性諸氏の意見も承りたいので、多数ご参加下さるようお願いいたします。また地方にお住まいの方々もご意見を寄せ下さい。

第二三五回現地小集會(予告)

本会富山支部創立二十周年を記念して、来る十月七日(土)、八日(日)に立山千寿ヶ原文部省登山研修所において、現地小集會を開催するよう準備中です。詳細は「山」九月号に掲載いたします。

小集會のお知らせ

小集會は、八月より毎月第四水曜日に新ルームで行なうことになりました。



熊の肉とスキの会

(一) 渡辺公平

山形支部で久しぶりに「熊の肉を食う会」を開いた。主催が支部、主管が山形岳連、後援西川町という形。五月三日の朝山形発、左沢から柳川までバス、それから大井沢峠を越えて中村の小学校に集合。講堂のような道場のような広間で、会は十七時半ごろからはじまった。

後藤支部長はじめ支部や地元の人たち総勢三十二名という大部隊で賑やかに峠を越え大井沢に着いたのが予定をだいぶ過ぎた十六時ごろ。

結論を急ぐようだが「熊」の話から報告しておこう。はるばる峠を越えてやってきた甲斐があつて実においしかった。熊はおなじみの名人志田忠徳さんが朝日岳で二頭止めておいてくれたもの。二匹ともおじいちゃんということ。それにしても肉がやわらかく、脂味も全然くどさや匂いもなかったのは庖丁の研えを物語るものか。但しソーテーにしたものだけはいささか固くたえがあまりすぎた。

大井沢の谷は漸く若芽がふき出したばかり、あざやかな緑の中に桜が薄桃色の花を点綴している季節で、山菜には少々早かったが、それでもコゴモ、キブノリ、アケビの芽などが勢熱に山

盛りされていった。なんともデラックスな春の饗宴であつた。村田銃をかついで朝日岳まで登ってくれた志田さんや大井沢の人たちには心からお礼を申し上げねばなるまい。またこういう機会をつくってくれた支部長や支部の方々にも感謝の意を表しておく。

第二日は全賈臨時バスで志津に直行。月山に登った。もっとも実際は姥ヶ岳の頂上でストップ、昨日に続く快晴下、大いにスキーを楽しむつ志津に滑降、ほいてやと仙台屋に分宿した。今年は月山の雪も例年より少ないとのことだったが、志津はいつものように楽しい山村だった。

報告はこれでおしまいが、私はこの通り歩いたわけではない。足の故障のため一行とは別のルート、つまり一行のスキーを乗せた車で志津、先行月山沢をへて中村に入り一行を待った。志田さんの宅で山菜を馳走にふたり谷の奥に残雪におおわれた朝日岳の稜線を眺めたりしながら、峠越えの一行が予定より二時間近くも遅れたのは峠から大頭森を往復したため、この山頂からの展望はすばらしくあつた。柳川の大江山岳会長今野久司氏の御案内。七十を二つばかりすぎた今野さんとわが村井、石原両氏の高齢トリオが元気なところを見せていた。

〔東京からの参加者〕村井、石原、牧野、網蔵、折井、沼倉、関口、堀川、鈴木、隈部、安藤、渡辺〔山形支部及び山形岳連からの参加者〕後藤幹、同恵、同三、村上、梅津、音山、真田、森山、金す、清水、福島支部より伊藤他三名。

(二)

関口周也

ようやく訪れた東北の遅い春の景色

にみとれている友と私は、いつまでも黙って話そうとしない。静寂を破るのが恐いことのように思われるからだ。飛び交うつばめの群れと水の流れただけが、ここでは動いているものの総てであるように思う。道端の流れに近く水芭蕉の清楚な姿が満ちたる春の光りに映えている。月山でスキーを楽しんだ翌日、帰りのバスを月山沢に捨て、月山に源を発する四谷川が寒河江川に合するあたりの小高い丘の上の草辺に、ただだまって座っている。

よく晴れた日の午前であつたが、それより二日前の五月三日早朝に私達は山形支部の人達と山形駅から、リンゴや桃の花が咲き並ぶ庄内平野を一路左沢へ向った。なほバスで西へ、平野がついて朝日連峰の前山にぶつかるころ柳川へ着いたのは九時頃であつた。

街道を見下す台地の上に建てられたお宅に、当地の山岳会会長今野久司氏を訪れた。憲法記念日を祝つてか、食膳には赤飯と山菜が山と用意されてあつた。午前十時後藤幹次山形支部長以下総勢約三十名は大井沢峠を目指して出発した。今野さんは七十何歳とのことであるが、老令をいささかも感じさせない足とりで我々の先達をつとめて。今野さんの踏みだした足は大地を一度つかむという感じだと評したくらいである。峠の頂きに近くなると未だ丈余の雪があり、その上を歩くようになる。雪の上を歩く準備をしていなかったで、私の足は靴下にまで水分がしみとおり、冷気を感じたが、春の陽ざしに汗ばんだ身体にはむしろ快うよさを覚えた。

峠の頂きから大頭森山へ往復する。いくつかのコブを越えて頂上へ立つと真白く雪に覆われた未だ冬の姿の朝日連峰を目のあたりに見ることが出来る。朝日は登ったことがない私は、峨々と連なる峰々をみて、いつの日か、

この足で踏破しようという欲望を感じた。峠の頂きから、ふきのとうが頭を出し、かたくりの花が可憐に咲く道を下ると、そこには今が盛りの桜花に彩られた大井沢部落のいかに平和な佇まいがあつた。山形のチベットのいわれ、長い峠道を越さなければ訪れることが出来なかつたこの部落の昔日の姿の再現であつた。寒河江川に沿って中村までの単調なかなり長いみちのりも春の光りに溶けこんでしまった身体にはそれほど苦痛ではなかつた。当夜は、中村で村の人の心づくしの熊肉料理が供された。これについては渡辺公平氏が詳細に書かれているので、割愛する。

翌朝、また峠を越えて帰るという今野老に別れを告げて、我々は貸切りバスで月山沢(ツキヤマザワ)へ下り、これより六十里越え街道を志津へ登った。志津へ近づくに従つて、バスは雪の壁を縫うように進む。六十里越えの道は未だ雪で埋もれている。十里越えの宿で仕度を整えて、九時半月山へ向う。雲一つない空に、月山は泰然とまえていた。この山へ初めて登る私は胸の高鳴るのを覚えた。姥沢小屋で昼食。雪の斜面の登りはいつまでも続いた。姥ヶ岳と牛首とのコルに三時半に着いた。ふきぬける冷風が肌に快い。姥ヶ岳頂上から我々のグループ十五人は態勢を整えなおして、滑降を開始した。滑りに滑つて宿の前の道ぎわに下る。振り返り仰ぎみると、月山は大きな陰におおわれて、夜の冷気にさらされようとしているところであつた。

最後の夜、寝床に入ってから皆はよく話をしていた。山登りのあとの満ち足りた幸福感にだれもが浸っているようであつた。「月山にのぼる……雲霧山気の中に氷雪を踏んでのぼること八里、更に日月行道の雲閑に入るかたあやしまれ、息絶え身こえて頂上に

至れば、日没して月頭なる。笹を敷き、篠を枕として臥して明るを待つ。」という奥の細道の一節を、だれかが口にしていた。

》Rudolf Rother《

ルドルフ・ローターが80歳になったという記事が「Bergsteiger」の五月号に出ていた。何処かで見たとような名前だと思つて先を読んでいるうちにやっと思ひ出した。

彼は一八八七年の四月二六日にライプツヒで生れた。私達は彼を山の小屋として知っていたのだ。スイスで教養を深め、ミュンヘンでは有名なBruckmann-Callway 出版社で経験を積んで、結局その地に定住した。

一九二〇年にルドルフ・ローター出版社を創立し、今は古典となっている多くの山岳関係書を出版した。その著者の中にはわれわれに親しいものも数多い。例えば Julius Kuzs, Karl Biedis, Guido Lammer, Guido Rey, Henry Hoek, Gunther Langes, Franz Grassler, Karl Springenschmid, Walther Flaig 等である。

彼は右の著者らの単行本ばかりでなく「Der Winter」、「Der Bergkletterer」、といった山の定期雑誌を刊行して、登山思想を普及し、その実践を奨励した。それに当時はまだ珍しかったスキー教室をアルプスの到るところで開きこれを指導し、その上、アルゴイとチロールとザルツブルクに山小屋を建てた。

世界大戦でスキー教室もダメになり、戦争末期にその出版社も灰燼に帰してしまつた。しかしその損害にもめげず彼は直ちに、当時既に60歳になっていたが、出版社を再建し、80歳の今日においてもかく健として、山の出版事業に精励しているという。(吉沢)



(会員)五十嵐力氏筆

雨乞登山

藤島

玄

一、金北山

みはるかす日本海は、とろろの碧一色。ワカメとアワビの豊庫、沖ノ御子岩の岩礁の白波も見えない。弧を描くスカイラインに重なるて、広がる御山平の高原。芝生色はまだ冬を残して夏の訪れには早く、枯れた褐色と鮮緑の縞模様をつくっている。仔を運れた夫婦の黒牛が、つかずはなれずの姿でキンボウの花群に立っている。芝生を侵蝕する低い雑木の繁みから雉が一直線に飛びたつ。雉も啼かずばの響やお伽話のケンケンと思いだす。山鳩と鴨の合唱のような啼声はちと意外であった。

芝生原を静かに楽しく歩むと、つづいて雉が四羽も走りだす。サワフタギ・ベニウツギ・レンゲツツジの花の群が芝生の中に散点して、雉の啼りに合せて歩を移すごとに新緑を彩っている。

正面は、大佐渡山脈の盟主金北山。東へ奥まっつて行者岳、北へ続く笠峰、ドンデン山は遠さかるばかりだが、南面へ二ノ岳、妙見山から扇山と深い戸地川の谷底から約八〇〇メートルの連なりと、佐渡第一の壮観である。ここで、金北山の祠堂を御山と称して遷移した外海府の人たちの心がしのばれる。案内に北片辺からきた柴治さんが今日は妙見山へ雨乞いに登った、とボツリという。

城跡のような大塚山の腰を捲いて、白トネ道の敷を払いながら登るとき、白梵天を捧げた法印様と半農半漁の村人たちの姿は想像したが、千束の柴を焚く雨乞祈禱はリーダー基地となつてはオフリミットだらうとも思った。二十日も続く旱天に、田畑は水に飢えてゐる。人の心もこへきては、雨乞祈禱の御神酒、御礼詣の御神酒とはかない期待と、濃い絶望感を酒でまぎらわすことに終るらしい。

神のおわしまさぬ金北山は素通り、残雪の水をたつぷり溜めたアヤメが池の無能の水神は相手にしないで行く。行者岳で足を止める。役ノ行者が前鬼、後鬼を従えた三尊仏を正しく基盤に据えた。理源大師の石像もそれに並べる。昔、倒壊したままの行者堂の残材をすっかり整理した。さて一杯というところだが鐘バールもない。

木の花と草の花が続きわたる縦走路。大ザレ、小ザレの石ころ道で東の海も西の海も曇ってきた。紅と緑に染めわけた石花高原。柴治さんは急いで降って行った。青粘峠から、大佐渡口ッへ向うころ、雨具を着けようか、このまま急ぐかと考えるほど、風は冷たくなり、霧の粒は大きくなった。イカ釣船の漁火を横切つて、雨の走る音をひとしきり聞いた。

二、青田南葉山

天皇、皇后賜杯の新潟国体を記念して、県民スポーツの日が制定されて第三回目だ。

信越線を行き来する車窓から、妙高山群より雪旺なる山を見てあの山は何んだと思わせるのが、高田市の南西郊外にある南葉山塊で、集団登山の会場となった。

高田市の競技場から、青田南葉山三合目まで車で行く。頸城平野を外れた山地は、田圃えの最中だが、乾ききった道がある砂塵で前走車に接近できない。

来て見ると、どれが頂上やらとほけた味の山であった。主脈の頂後まで東山腹の総てが雑木林の緩急の斜面からなる起伏に富んでいる。木落シの地名が散在しているのは、高田城の用材を伐採して運んだ名残りだというが、むしろ、近代になって製紙、製炭に開放した影響が大きいであろう。

急登がすぎると台地状の国見平の植林地があり、次の急坂が終ると雑木林に入った。驚くほど大きいイワカガミの紅花が、たまげほど沢山咲いていて、平頂部の緩急を楽しませた。

残雪に囲まれた青田南葉山の頂上は広く刈払つてあったが、仰望する神奈山が威圧するだけで、展望を遮る雑木が高すぎた。

一〇〇名余りの参加者は、弁当は下用意の筍汁だと、トンボ返しに下山して行った。どっかと腰を下したのは私の仲間だけ。好物の鯖ノ子につられて昼食にした。

たちまち、お不動様が御神酒を召上つたような活動が始まった。植生の杉で囲まれた南葉神社の石祠が正位置に起され、埋れた石鳥居の柱が立ち筍木が上げられた。

「社殿に指渡し二寸許り、円き銭の

『主な海外登山』V

一九六七年

13 一橋大学山岳会 H・K 登山隊

活動区域 パキスタン側 H・K
登山目標 サラグラール南東峰(七三〇七m、七三二〇m)及びその周辺。

隊員 山本健一郎(隊長・33)、倉知敬(28)、佐藤之敏(24)、佐藤久尚(24)、原博貞(24)、池知昭洋(24)、宮武幸久(20)、鈴木幸二(慈恵医大医学博士、36)

日程 6・25 全員チトラルに集合の目算つく。ここに到るまでに大部紆余曲折あり。今年は国境から約一〇キロ以内(七マイル)は立入禁止となっている。

総経費 八七〇万円。

14 RCCII・H・K 隊

活動区域 ヒンズー・ラージ山脈登山目標 Tun Peak(6672m)他
隊員 海老原道夫(26)、高橋善数(22)

日程 6 23 横浜港発、ナホトカ、ハバロフスク、タンセント、カプー、ベジャワール、チトラル。
7・5より8・20(登山期間)。

総予算 六〇万円。

15 東京農業大学 H・K 學術調査隊

活動区域 チトラル及びギルギット(予定)地方。
登山目標 別にうたわていない。ヤルフン河とギルギット河の上流域を農業関係調査の目標としているようである。

隊員 宮森常雄(隊長・35)、向後元彦(副隊長・27)、根本徳彦(23)、門田昭(24)、石井一郎(19)、向後紀代美(26)、清水哲夫(21)。

日程 7・5 ラウルビンディ全員集

合7・20 チトラル発、A 隊(チトラル河)、B 隊(ヤルフン河)9・10 ギルギット両隊合流。総予算 三四一万円。

16 東京白樺会 アンデス隊

活動区域 ペルー・ワイシニ山群
登山目標 ツアクラ(5774m、5564m)、ラサック(6040m)、ヒリシヤンカ(6126m)、エン・トロロ(6121m)、シウラ(6356m)。

隊員 市川正(隊長・36)、新井豊明(30)、本田守(21)、秋野尊愛(25)、宮田建夫(24)、坂井宏二(25・予備)。

日程 登山期間、6・6より20、6・25より7・10、8月中旬全員帰国。総予算 三六六万円。

17 山口大学 スワート・コーヒスタ

遠征隊
活動区域 スワート・コーヒスタ
登山目標 Mianle Sar(5900m)、Falak Sar(5988m)及び Cabral 河の源流。

隊員 長広善行(23)、秋山利之(22)。

日程 カラチ、ラウルビンディ、ベジャワール、サイド・シャリフ、カラム。以後登山(8月9月)。

総経費 一二五万円。

形なるもの往古より伝来して三個あり。俗に旱照銭、雨降銭、風吹銭と名付く。人有て旱照銭を動せば旱魃す。雨降銭を動せば霖雨となり、風吹銭を動せば暴風起ると、何れが其名に当るを知る者なし」云々と古記にある。

あるものは鍬銭のアルミ貨と黄銅貨ばかりだった。雪で倒伏した杉の下枝まで伐つて「これでもまず良し」といふら降つて「〇分たつと、アツ」という間もなく土煙りをあげて大粒の雨が落てきた。木陰で雨具を着け、荷の再分配をしたころは、目も開かぬ大降りとなった。

「夕立だア!」「大雨だア!」と滑つたり、転んだり、道の中を流れる水と一緒に走って、下に張つてある天幕へかけこんだ。

御神酒も美味、筍汁も美味、みんなで悦にいつているのに、浮かぬ顔しているのは莪和君だ一人だ。「この雨がわれわれの村まで降っているのだろうか?」「なるほど」となつて、雨男は高田市から東頸城郡の信濃坂へ車で走ることになった。

三、菱ガ岳

信濃の千曲川流域と海岸の頸城平野の文化と物質の交流は、古くから関田山脈を横断する峠路によって流通してき

新潟県内の峠群は、ここ関田山脈と、信濃川と魚



三、菱ガ岳

信濃の千曲川流域と海岸の頸城平野
の文化と物質の交
流は、古
くから関
田山脈を
横断する
峠路によ
って流通
してき
た。新潟
県内の峠
群は、こ
の関田山
脈と、信
濃川と魚



1962 信濃



野川が並流する間の魚沼丘陵と、佐渡の海外海と内海府を遮断する大佐渡山脈の「越え」である。

菱ガ岳は、高山でないが越後の名山であった。山体そのものが独立峰のように、魚沼層から安山岩を突きあげている。コースがまた面白い。細長い平頂部と、それよりやや低い須川山の間をぐるりと一周して起点へ戻っている。

一台の車を西の棚田（段々になった斜面の田圃）の上端に配置してから、須川の集落に戻ってから登ります。棚田が終った雑木林のドンドン清水へ出た。谷川が滝になったように噴出する。アキカソウ、カミクズバナなど、美事な花盛りだ。心なき奴がちらちらし、心ある聲がかたづけぬのは、その労力と時間の算定を知らないから清掃しないのだ。

菱ガ岳の頂上部の東側をまわる湿地に峠路の名残りの石畳がづき。残雪の傍に水芭蕉の花の群生が続く。雪溶けの状態になると、それが魚骨のように放射状に開く。須川峠道を探ねまわってしばらく辿ってみた。果境踏査隊が関田山脈を通して行ったあとを偲んだ。

指導標戻って、菱ガ岳の背面から一息の直登で平頂の一隅へ出た。西へ緩登むきで一等三角点へ出た。薬師堂は、北面の丘陵地帯から菱ガ岳の目印として見える大崩壊地の真上にあって、一間半×二間の新築だが、羽目板が五六カ所も破られ、中は落書でいっぱい。惜しいかなもう少しで真黒になるのに。

中央薬師如来、向って右阿弥陀如来、左釈迦如来の木像と拝したのが厨子に納めてある。昨年の栗や灯明の散乱を清掃して、左右の仏様の位置を替えて据えつけた。欠けた三角点石標を立てて全大観望する。雲の形がなんとなく、斜めに曇天を切る色だが明確な雲を異にしている。すぐくろぞと馳

けこむより早く、「二天俄にかき曇
電光、雷鳴、雨霰」なんという形容詞
は嘘でなかった。落雪に汚れてもお堂
は新しい。破けただけに風通しもよく
明るかったのが、日蝕のように暗くな
った。残してあった新聞用紙がザッザ
ッと舞い狂う。乾ききった土を大粒の
雨が叩くかとみる間に、バリバリと雹
が飛び散り、飛び跳ね、みるみるうち
に真白になった。

「これはめんずらし」立ちあがって
堂外をのぞいた途端、目もくらむ電光
と耳をろおする雷鳴、飛び上った二人
は後向きになって顔見合おせた。新葉
枯葉が千切れて水平に飛んで行く。遠
く近くの雷鳴電光の中に、親指大の雹
が五〇分も降り続いた。

鐘ビールで養和君は居眠り、私は雨
具をまとった。「夢山の奇事毎年二月
に入り夜中に限って雪崩あり、其響一
二里に聞ゆ。白髮白衣の考翁幣をもち
雪崩に乗りて下をたのう」と思い、
水晶のような雹を掌で觀賞した。堂内
の気温で十二度より降らなかつた。

夢が岳の西側は天を突くブナの原生
林だ。残雪に埋れた道を、霧の中で見
付けると、あとはもう降り一方だ。火
炎石の岩峰を捲き、不動滝の下のブナ
林へ出た。二段三〇メートルもあろう
か。増水した直下の姿は美しかった。
北面の山腹を捲いて用水溝に沿って田
圃へ出た。

薄目の射した下にな、一家中が干
割れた田を踏んでいた。一服つけて立
話していると、われわれが補修してき
た用水が蓄立てて三倍も流れてきた。

十重、二十重と大小の棚田がかさな
り、蒙古の包そっくりの山小屋が点在
する頸城丘陵の風景が、みるみるよみ
がえてゆくのが見渡された。

蔵王連峰夏山開きが五月二十一日熊野岳山頂で行なわれ、地元自石市から招かれて村井米子、藤島敏男、佐藤久一朗、小方金弘、山崎安治の五人が東京から参加した。
 五月二十日の第二松島で上野を出発し、その夜は遠刈田温泉の源兵衛旅館に一泊。二十一日に快晴に恵まれ、マイクロバスで青根、峨々温泉を経由し刈田岳と熊野岳山頂での山開き行事に
 ☆フランス隊コーカサスへ☆
 一九六六年七月一日から八月八日まで、フランスの登山隊が中央コーカサスへ入っていた。
 彼らは Bakkan 谷から出発して、シルヘダ西峰北壁、シュツロウスキー北西壁並びに、エルブルース南峰及び北峰の登頂に成功した(“Alpinismus”)
 ◇
 ☆西独 Allgäu 隊アラスカへ☆
 一九六七年四月一日、ミンヒエンの南西西にある Kempten の Fritz Hieber、Manfred Hummel が、北極経路でアラスカへ向った。
 同隊にはアメリカ在住のドイツ人、Richard Hechel (シッキムのタールン峰隊長)、Kurt Brittingmaier, Ludwig Ferche, Peter Hennig, Bernhard Seeger 並びに米人、Lowell Smith が参加した。

蔵王連峰山開き



野岳山頂で行なわれ、地元巨石市から招かれて村井米子、藤島敏男、佐藤久一朗、小方全弘、山崎安治の五人が東京から参加した。

五月二十日の第二松島で上野を出発し、その夜は遠刈田温泉の源兵衛旅館に一泊。二十一日に快晴に恵まれ、マイクロバスで青根、峨々温泉を経由し刈田岳と熊野岳山頂での山開き行事に

☆フランス隊コーカサスへ☆

彼らは *Bakken* 谷から出発して、シルヘダ西峰北壁、シュトロウスキー北西壁並びに、エルブルース南峰及び北峰の登頂に成功した ("*Alpinismus*" 5)

☆西独Allianz隊アラスカへ☆

一九六七年四月一日、ミンヒェンの西南西にある Kempen の Fritz Hieber と Manfred Hummel が、北極経由でアラスカへ向った。

同隊にはアメリカ在住のドイツ人 Richard Hechel シンキムのター
ルン(峰隊長)・Kurt Birtlingmaier,
Ludwig Fischer, Peter Hennig,
Bernhard Seeger 並びに米人、Lo-
well Smith が参加する。

☆ユーゴスラビア隊
のコーカサス行☆

26 Juli ~ 23 August, 1966, Gineez Krustic を隊長とするユーゴー隊がムゼンギ地域に入って活動した。その成果次の如し。Katyń 山北麓、Ulleraus-Baschin 北壁、特に Krunkol の北壁第三登は立派である。

その他 Dyck-Tau 南壁、ウル・アウス、バシ北壁及び Misching、東峰北壁の左右の壁柱等がある。

~~~~~

七月は金費月!!

大至急お払込み下さい。

参列した。蔵王の山開きは、仙台、白石、山形、上ノ山、蔵王、川崎、七ヶ宿の四市三町合同で行なわれ、山形から登ってこられた後藤幹次氏とも宿をあわせた。

終わって刈田峠から松ヶ峰、屏風岳、不忘山の南蔵王の稜線を縦走、一ノ鳥居コースから鎌先温泉に下り、一条旅館に宿泊。翌日帰京した。

刈田岳は山頂まで広いパス道路がうねうねと取りまき、赤茶けた山はだがむき出しとなり、見るも痛々しい有様だが、刈田峠以南はまだそれほど荒されておらず、ひと気もなまますますのコースであった。一ノ鳥居まで約二十キロ近く、午後七時すぎようやくバスの待つての一の鳥居に出た。白石市渡辺商工観光課長、高橋係長はじめ皆さんに色々お世話になった。ひとことお礼申し上げる。(山崎安治)

會員通信



☆日米合同アラスカ隊☆☆☆

(I) 津田周二

御無沙汰致しました。今回のアラスカ行きについて何かと御教示を有難う御座いました。

現地からはつい通信も出来ず申し訳なく思っています。四月五日羽田発シャートルで、七日フニャーバンクスのメンバールと会って、七日フニャーバンクスを経たノースウエイに到着。思ったより天候が悪くラッセル氷河上には、まだ半分も荷上げが出来ていなかった有様。十日の午後、漸く神戸市の宮崎助役と共にラッセル氷河上のベースキャンプへ行きました。(プッシュバイロットに行きました。プッシュバイロットは行ったセスナで行ったのです。) 天候やその他の都合で同日直に下山。ノースウエイに帰りました。

後は総て藤田副隊長に委せ、宮崎さんと一緒にフニャーバンクスへ戻り、その翌日エニスカール部落、アラスカ由央山帯の真中にある Anakvuk へ行きましました。ここはエニスカール約一〇〇名ほど住んでおり、山岳地帯のエニスカールとして唯一の部落だそうです。マ

イナス20度C位い、風が10メートル余りで相当寒かったでした。

それから、Fort Yukonへ廻りイ

ンデアーン部落を見て、ニヤーパー  
クスへ戻り、その翌日、更に北へ「H  
Barrow」へ Win という会社の定期  
空機に乗って行きました。ここは本当  
に極北の感じですよ。マイナス30度C。無  
風のためそれ程にも寒さは感じませ  
ん。極北研究所がある、U.S. Army  
がおり、オオカミ、キツネ等を捕獲し  
て飼育していました。エスキモーは数  
百人居住。そして実に立派な近代の学  
校が出来ています。U.S. Army の指  
令官のカマゴ兵舎（？）といっても実  
立派なものです。で、カクテルを御馳  
走になりました。

目的の山も二八日にどうやら登頂が出来た旨、連絡があり、ほっとしています。洵に山登りの隊長らしからぬ行動を取りましたが（多少予定は変更しましたが）予め、それは予定しておったことでした。

米國國の好意で無名鮑と  
Kobe と命名出来そうです。  
何れ又、詳細は報告申します。取敢  
ず要点のみ  
昭和四二年五月三日  
(吉沢宛)

(II)

藤田博

すっかり御無沙汰致しました。16日間の連続快晴にめぐまれ、目的の Mt. Kobe を始め Mr. Bona 周辺の山々に登ることが出来ました。別紙の通り報告致します。

日本山岳会の皆様によろしく。

なお、私は6月末に帰国致します。若しこの方面についての御質問が会員の方よりあれば、私宅の方に御連絡下さい。

勿々

3月20日先発隊の5名（藤田博・萩原・松本・大野・岡本）は空路及び海

路にてシアトルに集結致しました。本  
合同登山のアメリカ側の山岳団体であ  
るシアトルの“The Mountaineers”  
及び在シアトルの神戸貿易事務所の御  
尽力により二トン半の装備及び食料は  
無事通関を終り、アメリカ側の一トン  
半の装備・食糧と共に、アラスカ・ハ  
イウェイ上の寒村ノースウエイまでの  
トラック輸送をシアトルの運送会社  
に頼みました。この間僅かに3日間。全  
く順調にはかどりました。

Joint Expedition の有難さを感じ  
ました。

3月24日。大野一名を神戸の本隊との連絡のためシアトルに残し、藤田博萩原、松本、岡本の4名はアメリカ側でMr. Hasse（本年3月にワシントン大学を出たばかりの好青年）と共に小雨に煙るシアトルを後にアラスカのノースウエイまでの6,300kmの自動車の旅につきました。

車は神戸貿易事務所が予め手配してくれました。\$600のワゲン59年型のマイクローバス（9人乗り）で、これに整備代や保険料を\$100支払い会計\$1000になりました。24日は午後三時にシアトルのY.M.C.A.を出発したため、24日夜はVancouverの東約160キロのHope泊り、25日夜はDawson Creekの西南約240キロのMcLeod泊り、26日夜はDawson Creekで、エンジンの修理に時間を要し同地泊り。29日は終夜運転。28日はWhite Horse泊り。29日夕方、Northway Lodgeに着きました。

道路は北米大陸の話の通り素晴らしい舗装道路です。但しDawson Creekのすぐ北より砂利道となり（アラスカハイウェイ）、この砂利道はカナダ領を走り、アラスカに入ると、また舗装道路です。

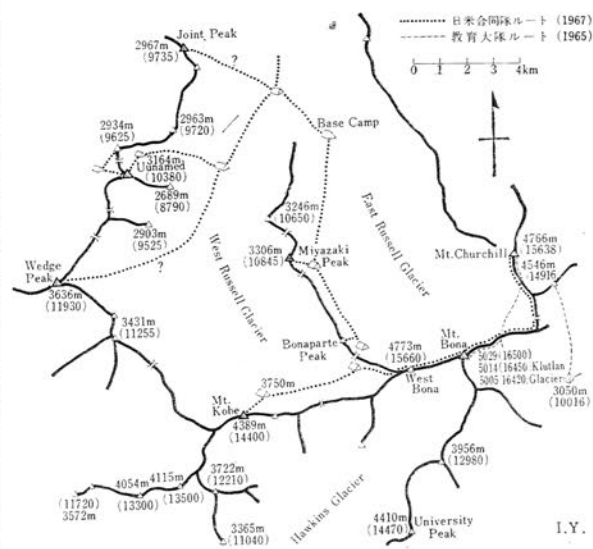
今後の登山隊も車を利用されることが多いと思いますので、末尾に小生の

感じた事を書いておきます。(この件  
は次便で送ります。)

3月29日。Northwayに到着の時は、装備を送ったトラック便が未だ到着せず心配しましたが、30日には大型トレーラーの混載便で日米両隊の全装備と食糧は完全に到着しました。

4月5日。神戸市助役、宮崎展雄を隊長とした日本隊の本隊（二名）……津田周二元関西支部長は隊長……シアトルに空路到着。6日はワシントン州知事、シアトル市長を訪問。同夜はシアトル市のオリンピック・ホテルで歓迎会。7日夜シアトル空港発。夜行便で空路フニアバンクス（＝日米飛鳥會と共に）。7日夜はフニアバンクス泊り。8日。貸切バスでノースウエイまで。同夜 Northwest Airport Lodge 泊り。6日。セスナ180型客席6名分2機で Mt. Bona の北の Russel Glacier (East 側) まい空輪を開始。

(2,200m) 4月21日。Mt. Bona の西約4キロのホル(高度3,900m)に第3キャンプを建設、初めてこのホルより Mt. Kobe を見る。22日。Mt. Bona にアメリカ隊5名と日本隊2名が登頂する。(日本隊は高度馴化がうまく行かず、高所Cにいた2名だけが登頂) 25日。アメリカ隊8名及び日本隊1名が飛行機で Northwest に帰る。(休暇の都合で) 26日。Mt. Kobe の直下に設けたC4(高度3,750m)C3のホルより高度は150m下る)を早朝に出発した日本隊3名。アメリカ隊3名の6名のアタック隊は約400mの高差の硬雪の急斜面を第一峰と第二峰のホルに向って登る。同夜はホル(2,200m)に雪洞を掘ってビバーク。27日。雪洞を4・40 a・mに出発したアタック隊は8・20 a・m第一峰の初登頂に成功。29日。日本隊3名、第一峰



の第2登に成功。30日(5月1日)日本隊6名(第一峰第3登及び二峰に初登頂)。

これで日本隊は氷河に到着後、日程の都合ですぐ帰られた宮崎団長、津田隊長及び休暇の都合で4月25日に帰った大西隊長、並びに年配の藤田博副隊長、藤田重夫カメラマンを除き、全員Mt. Kobe に登頂しました。

すなわち、萩原、松本、森川、大野中島、窪田、下山、稲留、羽根田、荒木、岡本がMt. Kobe に登頂をしました。なお松本は二回登りました。

5月2日。日本隊4名アメリカ隊4名はMt. Bona に向けC3のルートを出発して、Bona と West Bona (4772m) の中間まで登り、雪洞を掘りビバーク、翌日Mt. Bona に登り、アメリカ隊の4名と日本隊の萩原はMt. Churchill (4767m) まで足を延ばしC3に帰りました。

この時、日本隊には私が入っており、またのでブレイキになり日本隊は1名だけChurchill に派遣しました。私他2名はMt. Bona までにしました。

5月4日より各Camp 撤収にかかり、BCCに一同集結。5月6日よりWest Russell Glacier に廻り別紙通り初登頂を行いました。

成功の原因は4月18日より5月3日まで16日間連続快晴にめぐまれ、風も10m以下で連日行動出来たことです。

このような連日の快晴は「私の経験でも珍しい」とアラスカに経験のあるアメリカ側の隊長Randall氏もいっております。

5月12日。BCCに再び集結して約一カ月に亘るMt. Kobe を中心とする登山を終りました。

5月15日よりRussell 氷河よりNorthway への空輸を開始。15日、16日、17日は悪天候のため中断。5月

18日に全員Northway に集結しました。

その後3隊に分れてアラスカの調査見学をしております。

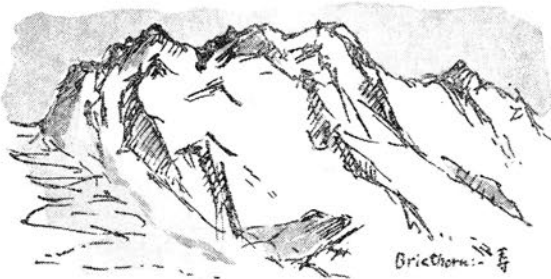
なお、Mt. Kobe (4,402m) は無名の未登峰でしたが、ワシントン州知事シアトル市長などの御発案で登山が成功すればJoint Expedition を記念してMt. Kobe と命名したいとアメリカ側より提案があり宮崎団長も心よく受けられました。

今後、色々手続きをふむ必要がありますが、いささつは以上のような次第です。(以上)

アンカリッジにて(四二・五・二六)(吉沢宛)

(編者注)アメリカ側隊員名訂正  
不参加者 G. Burdette, C. Carnahan, D. Holliday 以上三名

追加参加者 Herb Soley (36), Hiny Terry (24) 以上二名



## ◇女性ポリビア親善隊◇

拜啓

新緑は若々しく太陽に照りかえり、風薫る季節になりましたが、皆様にはますます御清祥の事と存じます。

さて、未熟な私達日本ポリビア親善隊も種々の紆余曲折を経て、この程ようやく出発の運びになりました。(五月二十三日午前十時羽田発)

これまでこぎつての事の出来ましたこと、ひとえに暖かい皆様の御支援の賜物と感謝の念に堪えぬ次第でございます。

現地に参りましてからも、多くの困難や危険に遭遇する事と思われますが常に一致協力してそれらを乗り越え、充実した三ヶ月間を過ごしたいと思っております。

これから何かと御心配をおかけする事と存じますが、若輩な私達に暖かい御支援を賜りますようお願い申し上げます。

出発に先立ち、謹んで御礼申し上げますとともに、これからの一層の御指導、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

日本ポリビア親善隊 かしこ

◎留守中連絡先 川崎市境町九 山田靖子方

◎現地連絡先 Nitto Bolivia Mining Co. Ltd. (日東ポリビア鉱山 K.K. 内)

Cañon 319, La Paz, Bolivia

## ◇ポリビア隊便り◇

前略

ハワイ、北米を経由して、五月二七日、ポリビアの首都、ラ・パスに無事に到着しました。途中リマに二日間滞在しましたが、霧雨が降り、リマの人達は大雨だと騒ぐような天候で、あまり快適ではありませんでした。

それからラ・パスに向け二七日の朝出発し、一時間半ほどで大平原の中の飛行場に到着したわけですが、今、空港は建設中、二年ほど先には近代的な立派なものになるそうです。

着いた時には、さして息苦しいとも頭痛いとも感じませんでしたが、税関の建物に、四〇七mと書いてあるのを見てから、三人ともどうも少しおかしくなったようです。

空港には大使館の方と、日東ポリビアの相馬さんほか総勢五人の方が出迎えて下さり、本当に言葉の不自由な私達には、この遠い国に来て、温かい歓迎に、涙の出る思いでした。出迎えの方のお蔭で、空港を無事に出ることができました。私達は夢見心地でいるので、他の方が総てやって下さり、知らぬうちにホテルに着いたといっても過言ではないでしょう。

それから夕方まで一眠りして、夕方から歓迎会だといって町の中を一周し、それから楽しい夜を過ごしました。十時頃ホテルに帰りつく、途端に雨が降り出し、部屋の窓を激しくたたきはじめました。

翌日、町より三〇〇(四〇〇m)高い飛行場の方では、白く一面の銀世界になっていました。二十八日は素晴らしい天気になり、丁度催されたインディオの祭りを観物にいききました。

山に登るのは、荷物の到着の関係で少し遅れるかも知れませんが、いろいろ出発前にはお世話になりましたが、こうして目的の山を目の前にして、計画をしっかりと立て、全力をつくしたいと思っておりますので、ご安心下さい。

なお、ホテル・アベニダにおりましたが、仲曾根さんという日本人副会長の方のご好意で、今はこちらのお宅の一室をお借りしています。

明日は、ポリビア山岳会との会見及び新聞社の方々との会見が控えています。

す。荷がつくまで、チャカルタヤ・スキー場、アイライコ山などに行く予定です。では皆様、お元気でラ・パスにて 関田美智子 清水 聡子 阿部 正子

## ◇

出発前はいろいろお世話になりましたが、5月27日、無事ラ・パスに到着しました。荷物が着くまでの付近のことを知ろうと、今日までゴルフ場(三五〇〇m)にいったり、ワイナボツシのふもとミニニ山の方に掛けたりしました。

また28日には、年に一度のインディオのお祭りが催されたので、そちらの方に観物に行きました。チチカカ湖の湖畔で強い日射を浴び楽しい一日でした。またポリビア山岳会の方々と毎日夜毎日お会いして親睦を深めています。

そして幸いなことに私たちの隊については、登山料を請求しないと約束して下さったので一安心しています。なお、昨日チャカルタヤに行きましたが10m以上の風でひどい目にあいました。今年は異常気象で雲多く強風の毎日です。ではまた。

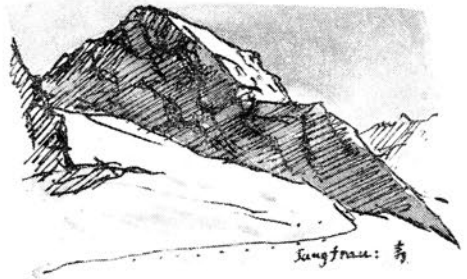
六月五日 日本ポリビア親善隊 (吉沢一郎宛)

アイガー北壁冬季  
単独試登者の遭難

一九六七年三月、フランス人のローラン・トラベリーニ(Roland Travelet, 31)は、ジョン・ハリソン記念ルートを独りでやろうとして墜落惨死した。

これについての詳細はまだ不明だが「Alpinismus」の六月号にはそれが出るように予告されている。

(I・Y)



## 『台湾の近況』

滝本 幸夫

(No. 5993)

前略 台湾の山について、今更会報に紹介する程のめずらしさはありませんが、昨夏よりJACの推薦を受けて、4月30日やっと憧れの玉山へ登る事ができました。

北海道からの遠征隊？は僕等が最初で、何かと歓迎を受けたものです。五岳会（台湾山岳協定指定した五つの山）それを踏破した人達だけの集まりという集会在年に数回あり、その年次総会を歓迎集会にかえてくれた程でした。

山へは都合により玉山だけしか行けませんでした。依然として門戸の開放は玉山と雪山のみです。蔡總統の話では、あと二、三年の辛抱でしょうとの事でした。台湾の明日は解らないと云うのがいつわらざる心境です。ところで僕等は、最初に予定してい

た日月潭と社一八通関のコースが、入山規制を受けたため、阿里山から一般コースから登りました。

在台半月の間、雨は一度もなく、玉山に登った日が一番好天気の様で、八〇〇万円をかけた排雲山荘（玉山山下という名称で呼ばれている）は今が急ピッチで建設がなされ、あと一ヶ月もすると三、五〇〇メートルの地点に、立派な山小屋として生れ変わる事になります。これが完成して、阿里山からタタカまでの森林鉄道が頻りに走り出すと、玉山は完全に大衆化された山になりそうです。

コースが変更されたお蔭で、観光はよくしました。嘉義、台南、高雄周辺をじっくり見、台北では六日間もがんばっていました。帰国前夜は、ものかいてあって、台湾の結婚式に招待され実に楽しい一夜を過ごしたものです。それでは取急ぎ御推薦賜わったお礼と台湾の近況お知らせです。

（北海道帯広エーデルワイス山岳会  
滝本グループ 訪華友好登山隊長 留  
萌在住）

## ◇エルブルズ登山隊帰国◇

私たちイラン・エルブルズ登山隊は、二カ月にわたる海外での合宿を終えて、四月十三日、全員無事横浜に帰ってまいりました。

この間三月四日、イランの最高峰デイマバン（五六〇一m）の積雪期登頂に成功したのをはじめ、ホルノ（四三三〇m）、サラキチオール（四二〇〇m）、コロガッキ（四〇五〇m）にも登頂し、多大の成果を収めることが出来ました。

これもひとえに皆様方の御支援のたまものと厚くお礼申し上げます。

昭和42年4月15日  
早稲田大学イラン・エルブルズ

## 登山隊

隊長 浜野吉生

## ◇ボルネオ島へ◇

拝啓新緑の美しい季節となり、この数日は初夏を思わせる暖かさですが、皆様お変わりなくお暮しの事と存じ上げます。

さて私この度、石油資源開発（株）海外本部在籍のままインドネシア國カリマンタン島（ボルネオ島）、バリックパンバンに一年の駐在を命ぜられ、五月上旬出発致しました。同地は石油の街で、ひと昔前シェール石油が開発を行っていた所ですが、インドネシア國営の石油会社プルミナ社の人々と協力して仕事を進めてまいります。

家族は東京に残して単身赴任致しますが、留守中も何とぞよろしく、簡単ではありますが、この近況お知らせ少々御挨拶まで申し上げます。

一九六七年五月一日 敬具

神原 達

T. Kambara,

Japex Balikpapan Office %, P.

N. Permiana Unit IV,

Balikpapan, Kalimantan, Indo-

nesia.

## ◇アフリカより戻る◇

拝啓 私、昨年九月早稲田大学アフリカ縦断登山隊に医療係隊員として参加致しまして、ソ連ヨーロッパを経てアフリカに移り、アルジェリア、モロッコ、ニジェール、ナイジェリア、カメルーン、チャド、スーダン、ウガンダ、ケニア、タンザニアを二万キロにわたって走破し、本年三月ケニア・ナイロビにて本隊解散後四月十一日帰国致しました。この間に、モロッコのツバカル（4165m）、他三座、サハラ砂漠のタハト（3003m）、タンザニアのキリマンジャロ（5991m）に登頂いたし

ました。

八カ月の旅の間、公私共多大のご厚情をいただき、ご芳志に厚く御礼申し上げます。カーストライド及び写真等整理後報告会を開かせていただきますが、とりあえず書面を以て帰国のご挨拶を申し上げます。

昭和四二年四月

岡部紀正

## Francis P. Farguher

AACの西海岸支部に属する長老、フアークハル氏は、この四月二十四日、California 大学から、古典文学名誉博士の称号を贈られた。その際フ博士は、「厚かましき、一方では公認会計士として、他方では、文筆家、歴史家並びに（天然資源の）保護管理論者としての二重生活を送られている」と紹介されたことである。

フ翁はJACで言えば木暮さんみたいな人、私は一九六二年にアンデスへの往復に一週間ゲストとして泊めてもらった。翁も奥さんも立派な登山家、Berkeleyにあるその家は、世界の登山家の集合所になっている。

(吉沢)

## 山里弄男個展

- 一、ヨーロッパの山・日本の山
- 二、八月四日〜九日
- 三、銀座松屋・七階画廊
- 四、出品点数約四十点

## ◎トルコの山

トルコの山へ行きたい人は、左記へ照会すると返事がもらえると思う。  
The Turkish Alpine Club, Isticai Caddesi 471/2 Tünei, Istanbul

## ☆イェルバハー初登への疑問☆

(II)

吉沢一郎

彼（バートン）は、壁の二つの部分を対照しようとしているのか、あるいは、二年間の状況を比較しようとしているののだろうか。それなら、何故、一六年間に亘る間の変化といふものを敢えて考えようとはしないのか。

あの時の水の状態について考えてみよう。まずわれわれの撮った写真、一九四七年に撮られた連続のもの、並びにPT紙の写真の注意してみると、山上の雪は、特にその上部において、一九六六年の登攀時は、われわれのやった時よりずっと少ないことがわかるし、一九五〇年当時と一九四七年では、状況が非常によく似ていることがわかる。

また、一九六六年に撮られた、南峰及び北峰間の山稜の写真によると、それが比較的難かしい氷に被われていることがわかるが、われわれが一九五〇年に通った時には殆んど問題がなかった。これはわれわれが頂上へ登る一週間ばかり前に降った新雪のためだと思

うが、主たる理由は、その年の一般的な状態にあったものであろう。

一方、西側の面について考えると、われわれは、イエ峰、ラサック峰間のコルにキャンプし、それから、西壁上にある大きなナダレ跡と、南西稜の背稜の間にあるほぼ中央のルートによって壁面を登っていった。

ところどころで深い軟雪にあったが、確かりした足場が方々にあった。われわれはたった二人だけの高所キャンプを設けただけだったので、荷は軽く、継続のためにアゴを出すこともなかった。

# アンデス通信

特別  
寄稿 東京 白稜会



5月14日。日本大使館の山口参事官を訪問。登山隊の装備は無税通関でき、食糧も登山隊のものとして Reasonable の範囲なら免税となるであろうとのこと。大蔵省などへの必要な手続はやって下さるということで安心する。

日本からやって来る登山隊の中には、大使館に顔を出さず、又外務省情報局を通じて、正式に連絡をとりずにくる隊もあるが、トラブルを起したときに困ること。

三菱商事訪問。通関業者はいつも三菱商事で使っていると紹介して下さる。三菱の使用人で二世の人が鉱山調査のため、馬の雇備などにくわしいそうで、その人が戻ったら、種々と話をきかせて下さるそうだ。

5月20日。セザール・モラレス氏を文部省体育局に訪ねる。教員たちが、ベイスアップのストライキ中で、文部省は警官がピケを張り、通行証がないと通してくれない。日本山岳協会の推薦状を通行証の代りにし、アルピニストであるということを通してもらう。

モラレス氏は非常に友好的。毎日、九時から十二時まで自由にきて、現在まで集積されているアンデス遠征の記録を調査してもよいということである。通行証も支給してくれた。

また登山隊のために迅速なる通関に関する書類をくれる。食糧の無税通関も可能らしい。二、〇〇〇ソールズ位の保証金で五日位の通関が可能とのこと。

東京農工大パーティの先発二名(田中、加藤両氏)も、モラレス氏訪問中で挨拶を交わす。

5月21日。13時頃、モラレス氏が迎えに来て自宅へ招待され、ペルー風の料理を御馳走になる。参考資料も豊富にあり、本を三冊ほど拝借する。儀礼的なおつき合いよりも、こういつつき合いをした方が何かと有利なようである。(以上、リマ第二信・5月22日)

◆  
我々の荷を積んだ崎島丸は予定通り5月25日に Callao に入港し、5月27日に荷役を終了しました。

ペルー大蔵省への無税通関申請は、5月26日に許可がありましたので、あとは如何に早く通関するか、この一週間が勝負だと思います。

長野隊の村井隊長は我々の後発と共に来られましたのでお会いしました。その他、宮下氏には会いましたが、他の人にはまだです。

モラレス氏より見せてもらった資料により、我々の行程は、チキアンタプシマ峠経由にて、リオ・セリアに入り、ツァクラ・グランデは南面よりア

タックする予定です。(イタリー隊の記録に基いて)

北面を狙っているパーティも、今迄に幾つかあるらしいのですが、うまくいかなかったようです。その他、リオ・セリアをこえます、このあたりに二、三の未登峰があるようです。ラフ・コヨタ・スール(五、四二七m)。ラフ・コヨタ・スール(五、三四〇m)。ツァクラ・グランデ・オエステ(五、五八九m)など。

その後、当初のキャラバン・ルートを逆に、ラダナ・ヒナコング・ワイワシニ経由、カルパ・コチャ、または、ミツ・コチャに入り、ヒリシヤンカに向うつもりです。

ヒリシヤンカは1963・1969年版、Mountain World 及び1966年11月号、Alpinismus 誌を見ました。昨年のオーストリア隊は、ミツコチャよりCIIまで出し、以後二回のピバークを重ねて登頂。頂上で三度目のピバーク(多分)。下降中に四度目のピバークをしています。いろいろな写真を見るにつけ、山だとの感を深くします。ツァクラ・グランデ南面も中間に傾斜の強い岩壁帯があり、これがキー・ポイントになるようです。

ポルタドールは、モラレス氏紹介のセルヒヨ・カコに会いました。

キャラバン中はアリエロ頭をつとめ、以後ポーターとして働き、帰路のアリエロ頭もつとめることで、費用の点からも能率の面からも有利なので契約書を書きました。ポーターとしては70ソールズ(一日当り)でやってくるとのこと。まずまずのところと思っています。6月5日頃にはチキアンに向って出発できるのではないかと考えます。

新聞社関係は唯一の日本字紙、ペルー新報へ挨拶に行きました。

その後、変なキツカケから、現地紙

コメルシオのインタビュを受け、5月26日付の朝刊に簡単な紹介記事が出ていました。それだけと思ったら、夕刊に写真入りの大きな記事が出たのに恐れ入りました。

以上、リマ第三信 5月28日

市川 正  
(編者注・東京白稜会ペルーアンデス遠征隊の通信であるが、個人的な部分など一部割愛した。)

Dr Adolf Demberger  
の便の

オーストリア山岳会の大御所、アドルフ・D老からはもう二、三回手紙をもらっているが、今度(日付を忘れていた)のは皆さんにも参考になることが書いてあるので、一部を紹介しよう。

・一九六七年のH・K  
オーストリアから三、四隊  
ドイツから四隊  
イタリアから二、三隊

その他、フランス、英国、チェコスロバキア等。次週にこれらのリストを送る。

私の息子(Kurt)もH・Kに行つたが、日本隊の誰かに会えるといっている。

日本隊の世界中での活躍は刮目に値するが、私はその総てを知っている。

私は先週定年で学校を円満退職しました(生物学主任教授)。これから年金生活ですが、これからはもっと世界登山界の問題に取組んで行くつもりです。「山岳」は非常に重要な文獻で毎年見ているが、英文欄の短いのが残念。現在貴殿はオーストリア山岳会の記録チームの一員となっているのだから、日本隊の動勢について時に応じてご連絡下さるようお願いいたします。(以下略)

(吉沢一郎)

固定綱を一本とりつけただけで、足場刻みも殆んど不要であった。この理由の一つは、雪の状態にもよるが、わたしが爪代りに手に携えていた短い氷斧と氷用のハンマーがあったことにもよるのである。

この引っかけ技術は、われわれの高所キャンプと頂後の間にある最後の60mのところではとても役に立った。

以上述べたことでの重要なのは、他の登攀隊よりも疲れが少ない(と信じていた)状態で、頂後に達することが出来たという点である。

次には頂後について言おう。われわれは幸いにも、大きな雪庇に割れ目を発見した。われわれはこれを通って山稜の背に出た。そこには比較的広い(6m)幅の、軟かい容易な雪庇が岩場に達する手前のところは、ずっと急で狭くなっていた。

岩場と最後の頂後。もしそこが危険で、難しい(少なくとも岩場では)というなら、わたしも同意する。一九五〇年にわれわれがあった状況は、後年のパーティのより良かったことは確かである。われわれの時には、岩場は岩と岩面の間(注・窪みのことか?)が雪(粉雪)に被われていて、西壁と南壁(南西壁であろう)の間の背後には、青水の薄い庇が走っていた。

ここはわれわれにとってさへ非常に危険で、且困難に見えた。だがわたしは前進した。頭が正常でなかったからかも知れない。どうしてこうなったかを簡単に説明してみよう。

われわれは山の下で数週間過ごしたわけだが、その間にマックススウェルとわたしの間にちょっとしたいざこざが起きた。その大部分は例の「キャンピ熱」(cabin fever、狭い室内で長く共同生活をしている時のイライラ病のこと)か現象であろう。(次号に続く)



# 図書紹介

E・シプトン著  
諏訪多蔵訳  
『地図の空白部』  
ヒマラヤ名著全集

今日、ヒマラヤに関心を寄せるほどの人、エリック・シプトンの名を知らぬ者はおそらくなからう。スマイスと行を共にしたカメットの初登頂からエベレスト、カラコラム、ムズターグ・アタ、チョー・オユウ等々、彼の足跡は広汎に亘り、その年代も一九三一年から五二年に及んでいる。

書かれた著書も何冊かになっしているが、そのなかでも『ナンダ・デヴィ』と、今回会員諏訪多氏によって訳された本書『地図の空白部』は最も出色のものと思う。シプトンは青年時代ケニアで烈しい登攀もやり、その道でも豪傑とされているが、彼の本領はむしろ人跡未踏の領域を探索することにあつたと思う。人々くなくなった最近のヒマラヤには目もくれず、五八年以降何度もパタゴニアの荒涼たる自然に足

をむけているところを見ると、とくにその感が深いのを覚える。  
本書は彼がティルマンラと一九三七年に行なったカラコラムのジャクスガム探査行を記したものであり、原書は一九三八年発行のもので且つ内容のすぐれていることから、既にヒマラヤ文献中に確固たる位置を与えられている。

訳者は多年ヒマラヤの文献に親しみ、現在の日本で最も適任者の一人と考えられる人であるから、信頼にたる訳であると思うが、いささか緊張しすぎたせいか、前半はやや生硬な感なきを得ない。しかし、半近くなると訳文はずつとなめらかになる。「われわれは泉のそばで野営をした。泉の水はきれいに澄んで、かすかな波立ちを残しながら、小さな流れとなっていた。(中略)ベミカンとエゾネギを意込んだ夕食の後、心地よい砂のベッドに横になつて、忍びの夜の気配を見つめていた。荒れし山々が、夕闇のなかにその姿をじんわりとけこませ、現実のものと思えぬまぼろしに変化してゆく。このように自然にわけこむとするような素朴さのある旅というものは、なんとすばらしいものなのであろうか。私は中央アジアの星座を追いながら、眠りにおちるのを待っていた。私は眠つたのであろうか。それとも空間のたゆまないリズムのなかのつかの間、一緒にいたのだったろうか?」(一三〇—一頁)というようなくだりは、原文の見事に照応して訳本もすぐれたものとなっている。

原書につけられた付録のうちオーディンの地質概要ははぶき、その代りK・メイソンの地名ノートがG.J. 69: 4 (1927) から訳出添付されている。また折込み地図は原書の等高線入りのものがカムカルテに書き替えられているが、三色刷の極めてすぐれた出来栄え

で訳書の価値を高めている。写真も原書のもので大部分収録されている。更に訳者による一八頁に亘る解説がついていて、内容もよく、本文中の訳注と共に読者に至れり尽せりの親切さを示している。造本、印刷もまず上の部で、誤植の殆んど目につかぬ点も非常にいい。

ただ一つ気のついた点は、訳者が解説中で無意識にカラコラムとカラコルムを混用している点である。現在では何れが正しいかを決定するまでになっていない。(この点について私は曾て深田久弥氏「ヒマラヤの高峰」第四巻添付の月報4に一文を草したことがある。)アルバイン・ジャーナルの編者も同様な見解をとっている。(A.J. No. 305, Nov. 1962, p. 348)

しかし同一人が一つの文章にかく場合は、何れかに統一しておくべきであろう。なお原著者はカラコラムを使っているのだから、三九頁の概念図は当然カラコラムとした方がよい。一冊の本を完結することは、やった者でないとその苦勞がわからない。訳者の労は定めし大きかったであろうが、本訳書が今後のわが国の海外遠征に資するところは決して少なくないであらう。

(A5判三〇〇頁、一九六七年六月十五日、あかね書房刊定価一〇〇〇円) (望月達夫)

## The Himalayas

An Illustrated Summary of the World's Highest Mountain Ranges—

Compiled & Produced by D. Mordecai of Daw Sen & Co., Private Ltd., Calcutta, 1966

この冊子 (Brochure) については

会報二五九号にかいてあるが、ヒマラヤン・クラブのニューズ・レターに広告が入ってきたのを見てすぐインドへ注文したのが、このたびといた。三〇センチハ八センチの横長の厚い紙の表紙の本で、全体で五八ページ、写真と本文が交互にならんでいる。

写真は巻頭の折り込み展望図とカラールのカンチエンジュンガ連峰のほかにほとんどがページ一ぱいのモノクロであるが、あまり素晴らしいとはいえない。切れ込みの良くない、中にはあとから修正したあとのあまりにもはつきりとわかる写真が多く、わが「山岳」の中の写真や深田さんの「ヒマラヤの高峰」の写真集の方がよほど迫力がある。おまけにページによって黒や紫や青などのいろいろな色のインクで刷つてある。勿論一つの写真は一つの色で

のでもいかにも安っぽく感じられる。しかしインド空軍提供のカメット・グループの写真などのように気持のよいものの中にはある。撮影者は著者の Mordecai のほかインド山岳財団、E. Schneider, M. Hruska などである。この本の本務は高さの順に並べられた五三〇座(ほかに補遺として三八座があると思われるが、それは、(A)山の通し番号、(B)山名、(C)山系、(D)高さ(フィート)、(E)緯度、(F)経度、(G)登頂者(登頂年と国名も書いてあるがリーダーの名前はほとんどかいてない)の七つの欄に分けてかいてある。

山系はヒンドゥ・クシュ、カラコラム、パンジャブ・ヒマラヤ、クマウン・ヒマラヤ、ネパール・ヒマラヤなどと分けられているのだが、ナムチ・バルワは Eastern Himalaya とあるのにギャラ・ペリは East Himalaya とあったり、モディツェ南峰だけは Annapurna というように細かく分け

てあったりして、(モディツェ中央峰・北峰は Naga) とあるのだからますますおかしい。どうも全体の統一がとれていないようだ。

緯度経度については二五〇〇フィート以上の峰にはほとんど何度何分何秒までかいてあるが、それ以下の大部分の峰には分までしか出していない。巻末にある順の索引と照らし合わせて見るためには写真だけでも前に出し、本文は本文でまとめておいた方がよほど見易い。二〇、〇〇〇フィート以上五六八座の中には無名峰が一七座あり、索引に入られないので、まとめて一番後につけ加えてあるのは愉快だ。

インド・エベレスト隊の二人の写真が一人一人載っており、不完全なところがある本ながら、登山界においても最近めきめき腕を上げてきた新興国インドの意気を示す快著といえよう。いずれ内容の立ち入ったことについては吉沢さんあたりによって詳細に検討されるべきだと思うが、ひとまず速報という意味でお知らせした次第。(会員番号五八七三) 松崎中正

後記・この原稿を書きましてから気づいたのだが、エベレストの写真でロイツェとロイツェ・シャルに矢印で名前がつけられているのが間違っている。ロイツェ・シャルとあるのが実はロイツェで、ロイツェとあるのがロイツェ・シャルなのである。しかもロイツェの高さに二七八七〇フィートとあるのは二七、八九〇フィートの間違いだ。

(編者注・ご指名によりいづれゆつくりみ、他の人の意見も加えて詳細に検討してみようと思う。尚、ロイツェの最近の高度は二七九二三フィート(八五一一m)となっている。No. 263 三頁参照)

## RIVISTA MENSILE

Anno 87-No. 12, Torino, Dicembre 1966

イタリー山岳会の機関誌、リビスタ・メンシレの昨年十二月号が届いたが、この号には Andrea Mellano 氏と Riccardo Varvelli 氏による Afgan '65 と題して一九六五年に中央アジアのペンダホルム（六八四三）を南西麓から登った詳しい記録が載っている。最近の方面を専らする隊が多いので紹介しつづける。

この号には他に Cronach Alpina 1965 イタリー山岳会 Centenario の記事がみられる。（松田）

## The Yorkshire Ramblers Club Journal

Volume X No. 33 1966

此の号で特筆すべきものは R. Gowing 氏による日本に関する二つの記事がみられることである。

リチャード・ガウイング氏は東海村の原研に勤務され、本会創立六十周年の記念パーティーにも出席されたので、御存知の方も多いと思う。

この号には、同氏が滞日中登山した、十一月の富士山と夏の北アルプスをそれぞれ Fuji-San, The Northern Alps of Japan と題して寄稿している。日本の山の歴史的背景もよく調べており、記述も正確なので、われわれ日本人が読んでも大変に参考になる。日本の山が、大変興味をもたれている時だけに、貴重な資料になることと思われる。

尚最近届いた同氏からの書信によると、十二月下旬に再び六カ月位の予定で東海村にいられるとのことである。

尚本号には The British Expedition to the Edelweissrhütte nach, 1965 と題した洞窟探検をはじめ

のよう Ramblers の雑誌上には掲載がなされる。（松田）

## Journal Arrived in

Aug. 1966-May 1967

Rivista Mensile  
No. 1-12 1966 ①Club Alpino Italiano ②—

Appalachia Dec 1966 ①Appalachian M.C. ②—

Mountaineering Autumn 1966 ①British Mountaineering Council ②—

Revista Peruana de Andinismo No. 1964-65 ①Club Andino Peruano ②—

61. Jahresbericht 1965-66 ①Akademischer Alpenclub Bern ②Alpenclub Bern ③New Zealand Alpine Journal ④New Zealand A.C. ⑤—

The Canterbury Mountaineer 1965-1966 ①Canterbury M.C. ②—

The Yorkshire Rambler's Club Journal ①Yorkshire R. Club ②—

La Montaña No. 8 Nov. '66 ①Federacion Argentina de Montañismo y afines ②—

Sierra Club Bulletin Sept '66-Feb '67 ①Sierra Club ②—

Himalayan-chronik 1965 ①G.O. Dyhrenfurth ②—

Himalayan Mountaineering Journal. ①Himalayan Mountaineering Institute ②—

The Alpine Journal 1966(1) &(2) ①Alpine Club ②—

Himalayan Journal 1965 ①Himalayan Club ②—

Alpinismus Sept. '66-Feb '67 ①—

Der Bergsteiger Sept '66-Feb '67 ①—

Appalachia Bulletin July '66-Apr. '67 ①—

Österreichische Alpenzeitung Forge 1346-1351 Mar/Apr 1966-Jan/Feb 1967 ①Österreichische Alpenklub ②—

Bulletin trimestriel No. 22-24 Oct '66, Mar '67 ①U.I.A.A. ②—

## 金平山

## 木暮理太郎翁碑前懇親会

## 山梨支部

五月の金山平は本当にすばらしい。山ナシの花が咲き、エメラルドに輝くカラ松の芽を、足もとはクリン草の赤い小さな花びら。ウグイスとカッウの声が私たちを迎えてくれた。

第五回木暮翁碑前懇親会は、五月晴れの五月二十日から二十一日にかけて、東京からのお客様を迎えて開かれた。恒例により十六時より、碑前において、翁をしのびながら、碑前祭をとりおこなった。

席上、神谷名誉会員は、東京支部の解散山行と日が重なってしまい、同行者がすくないが、呉々もよろしくとの伝言があつた。私は木暮先生の手紙を何本か持っているが、どれも巻紙に達筆でかかれていた。中でも、大島亮吉さんの原稿に、木暮先生が前文をかかれていてお二人の原稿が私の手もとにあるが、これをねらって私の死ぬのをまつている者がいく人かおる。はやい機会にこれを一回こへ持参したい。また将来金山平に木暮さんの文獻を集めて文庫みたいなものを建ててみたいと思っている。

カナデアンロックキーに近く行かれる今井喜美子さんは、戦前二度程来たことがあるが、

木暮先生が、こんなにすばらしい所に眠つておられるかと思うと、うらやましくてしかたありません。もっと早い機会に来ればよかったと思います。そういつては申訳ありませんが、東京支部の山行をけつてこちらへ来て本当によかったと思います。

小野利次さんは、私の山歩きの第一歩が奥秩父であったので、神谷さんに誘われて来ましたが、山梨支部の方々に本当にお世話になります。よろしく。

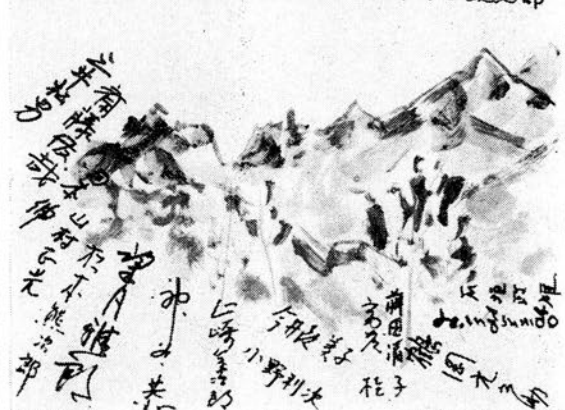
以上のような記念談話のあと、十八時より有井館のランプの下で、毎回好評を得ている斎藤俊哉支部常務委員をコック長とする、山梨料理のオムレツとなつた。曰く、こい、わらび、沢わさびの酢の物。山うどのゴマよし、キャラプス、いたどりのマヨネーズ和え。うど、わらび、さんしょの若芽、たらのめのテンブラ。レバのチャシュー。それに今年もシシ肉のさしみ。

甲州独特の「煮貝」（あわびの醤油煮）これらが九州小田原の中皿にもりつけられ、酒は秋田の「新政」か丹波のろうそく徳利、九州竜門司のからから、沖縄壺屋のたらびん、九州小石原の雲助などオカシな、日本各地の民衆のさかすかきでかみかわされた。

一水会の松本久男画伯のスケッチをかこんで書きをし、夜の更けるにしたがつて、各自得意ののどの御披露などがあり、八幡山で鳴く仏法僧の声もともすれば消えがちであった。

明けて、ほととぎすの音、高い声で眼を覚まし、快晴にめぐまれた山路を、東京勢は三井支部長手配によるトラックにのちのり、信州峠を経て信濃川上に、山梨勢は木賊峠へうど掘りと二手に別れ、一日の山行を終り、夕刻解散した。（山村正光記）

木暮理太郎翁碑前懇親会  
1967年5月20日〜21日 J.A.C. 山梨支部



木暮先生が、こんなにすばらしい所に眠つておられるかと思うと、うらやましくてしかたありません。もっと早い機会に来ればよかったと思います。そういつては申訳ありませんが、東京支部の山行をけつてこちらへ来て本当によかったと思います。

小野利次さんは、私の山歩きの第一歩が奥秩父であったので、神谷さんに誘われて来ましたが、山梨支部の方々に本当にお世話になります。よろしく。

以上のような記念談話のあと、十八時より有井館のランプの下で、毎回好評を得ている斎藤俊哉支部常務委員をコック長とする、山梨料理のオムレツとなつた。曰く、こい、わらび、沢わさびの酢の物。山うどのゴマよし、キャラプス、いたどりのマヨネーズ和え。うど、わらび、さんしょの若芽、たらのめのテンブラ。レバのチャシュー。それに今年もシシ肉のさしみ。

甲州独特の「煮貝」（あわびの醤油煮）これらが九州小田原の中皿にもりつけられ、酒は秋田の「新政」か丹波のろうそく徳利、九州竜門司のからから、沖縄壺屋のたらびん、九州小石原の雲助などオカシな、日本各地の民衆のさかすかきでかみかわされた。

一水会の松本久男画伯のスケッチをかこんで書きをし、夜の更けるにしたがつて、各自得意ののどの御披露などがあり、八幡山で鳴く仏法僧の声もともすれば消えがちであった。

明けて、ほととぎすの音、高い声で眼を覚まし、快晴にめぐまれた山路を、東京勢は三井支部長手配によるトラックにのちのり、信州峠を経て信濃川上に、山梨勢は木賊峠へうど掘りと二手に別れ、一日の山行を終り、夕刻解散した。（山村正光記）



## 会務報告

### 六月定例理事・評議員会

(一日・ルーム)

△出席者 松方会長、理事 深田、辰沼、大塚、飯野、広谷、長尾、竹田、関口、大貫、酒井。評議員 吉沢、石原、沼倉、中屋、川森。監事 松本、牧野。

(以下委任) 三田、渡辺両副会長、理事 松田、宮下、丹部、平山、中島、野田。評議員 藤島、島田、津田、高山、須賀。

▽議事・報告事項  
(1) 本年度各専門委員会運営方針及び構成に関する件……大塚  
各担当理事から標記につき報告があり、検討の結果決定された。

#### ①婦人懇談会

婦人登山に関する課題を拾ってゆくに、一月一回懇談会を行なう。出席出来ない人からはアンケートを出し回答を送ってもらう。出来るだけ

山登りをする。  
委員、村井米子(長) 宮崎英子、武田満子、山口節子、折井正子、担当理事 広谷光一郎。

#### ②指導委員会

前東京支部から引継いだ技術研修会、スキー講習会及び各支部からの要請に対する派遣講師グループの確保などを行なう。その他谷川岳遭難防止条例に基づく登山届の取扱い等も担当する。

委員 山崎安治(長) 安彦六郎、村木潤次郎、宮下秀樹、小味秀純、松永敏郎、倉知敏、金坂一郎、川上隆  
担当理事 広谷光一郎。

#### ③集会委員会

春季懇談会、年次晩餐会を含め毎月一回集会を原則として、新ルームで行なう。現地小集会は集約的にP・R・を。土曜会についてもお手伝いする。定例集会日を何日にするかはもう少し検討したい。通知は会報で行ないたい。

委員 山崎安治、金坂一郎、松田雄一、大塚博美、丹部節雄、広谷光一郎、松本熊次郎、堀川英司郎、木野悍、中保、鈴木郭之、山下一夫、西丸震哉、今井嘉道、担当理事 関口周也。

#### ④遭難対策委員会

昨年実施したシンポジウムの結果を小人数できめ細かく検討する。結論が出ればこれを印刷し公けにした。大学山岳部に関するシンポジウムを出来れば秋又は来春に行ないたい。委員 相沢裕文、徳久球雄、藤田佳宏、大塚博美、芳野勉夫、平山善吉、川上隆、担当理事 辰沼広吉

#### ⑤調査研究委員会

指導員、グレーディング、雪崩、医療を取扱う。その他、医療連絡会の事務局ともなり、山岳診療所の助成金配布の事務を担当する。富士、



### ◇東海支部

#### 昭和四二年度総会報告◇

△日時 昭和四二年度四月二三日  
午後二時より午後四時

#### △会場 名古屋都ホテル

△出席者 辰沼広吉、松田雄一(本部) 中世古隆司、黒山明彦、田中元、池沼慧、小栗喜治、原真、佐久間孝、石原國利、花井俊彦、浅井修二、湯淺道男、熊沢正夫、市川章弘、高橋達雄、黒宮義孝、前谷東雄、伊藤洋平、大塚博美、丹部節雄、兼田喜代志、吉川友章、鈴木重彦、石本昌勝、山田勇、矢入憲二、神谷真吾、大和幹夫(順不同・敬略称)

#### ▽報告・議事録

##### (1) 昭和四一年度事業報告

昭和四一年度決算報告。尚、これに関連して支部費未納問題について討議された。

##### (2) 本年度事業計画について

本年度事業計画について。前年度以上に講演会等を積極的に推し進めること、「東海山岳」「遠征報告書」および「支部報」等の発刊を推し進めること等、が確認された。

##### (3) 予算案について

昭和四二年度新役員選出(後記)。日本山岳協会設立と東海支部のあり方。

(4) この問題についてはかねてからの懸案であったので、特に本部から辰沼

・松田両理事、愛知岳連から大和理事の御出席を賜わり、辰沼理事からは日山協設立の由来および趣旨、松田理事からは日山協の現況と問題点、大和氏より愛知岳連の立場を、それぞれうけたまわった。これらの御説明を中心に「東海支部の態度」について議論されたが、遺憾ながら時間の都合上、十分な討議をすることができず、一応原則的な態度の決定については役員会に一任する、というところで結論は留保された。

#### ▽昭和四二年度新役員

支部長・熊沢正夫、副支部長・伊藤洋平、常務委員・原真、中世古隆司、庶務・吹原優二、黒山明彦、会計・小栗喜治、矢入憲二、図書・本多善博、東海支部報・湯淺道男、会計監事・村井嘉一、東京連絡・田村俊介、岐阜連絡・高橋達雄その他・吉川友章、大橋喜治、木村哲夫、尾上昇

総会議事終了後、ただちに別室に移り恒例の懇親会を催した。ビールを傾け乍らの辰沼・松田両理事を囲んでの日山協問題を中心とした放談。はきわめて有意義であった、との評のうちに午後七時無事散会した。尚、前日の本部懇親会にひきつづいて、遠路御来名賜わった両理事に紙面をもつて厚く御礼申し上げます。(文責・湯淺道男)

#### ボリビアが非常事態宣言

ボリビア国政府は六月七日、国内騒擾を理由に非常事態を宣言すると共に、憲法上の保障を停止した。同国では過去数週間政局混乱が続いており、南東部でゲリラ活動が活発化していたという。編者が注すればこんなことは年中行事の日常茶飯事、だが夜は御注意、突然バリバリとくる可能性もある。現にわれわれが行った時にも、夜機関銃でやられたのがいた。(I・Y)

#### 文部省登山研修所初代所長

七月一日に開所される立山の登山研修所の初代所長は井上一男氏(48)。山とは無縁だがバスケットはやったことがあるそう。山形師範、東京高師東京文理大を出て文部省では学校体育専門に歩く。目標は高校山岳部の指導者養成、大学生を対象にしたリーダーの養成、職場と地域クラブの指導者養成にあるという。

#### リニクサック

##### 第十一号発行

早稲田大学山岳部の部報「リニクサック」第十一号が戦後初めて発行されることになった。昭和十七年度から四十年までの二十四年間の部の行動を伝えるもので、戦後早稲田が行なったアコンカガ、マッキンレー、コルディエラ・ブランカ、ローツェン・シャールなど海外登山の記録も全部含めてある。A5版、七百ページの大々的なものである。頒価は二千円だが、本会会員には一割引きするという。

#### 計報

吉野 昇氏 昨年六月十五日を以て、健康上の理由で退職された。前任の本会書記吉野昇氏は、友愛十字会老人ホームに転居して静養しておられたが、その後健康がすぐれず、本年六月六日午前五時、直腸ガンにて東京代々木幡ヶ谷のクロス病院において逝去されました。享年六十三歳。

謹んで哀悼の意を表します。本会では六月十七日午後、大塚、松田、若村の三名で、遺族を訪問し弔意を表した。尚吉野氏の香典はルームにて集めておりますので、何卒宜しく願ひ申し上げます。

(遺族) 東京都世田谷区廻沢六六〇 長男 佐藤英

／山の高山医学研究所については、厚生省より強く要望を受けているので、医師勤務の確保が困難ではあるが是非とも実施したいと考えている。なおこの件については常務理事会で再検討することにした。

雪崩研究についてはメンバーをも少し補強したい。

委員―加藤泰安(長) 辰沼広吉、金坂一郎、村木潤次郎、松田雄一、広谷光一郎、三方淳男、担当理事―長尾佛夫。

⑥山日記編集委員会

編集日程 八月一日、全原稿締切  
八月二十日 最終入稿及び校閲終了  
九月二十日 校了  
十月十五日 印刷終了  
十一月一日 発行

十月初め 山日記のしおり刊行。  
記事欄内容

巻頭、登山者と自然保護について

松方三郎

○登山の基礎―小原勝郎

○山の装備―大塚博美

○山の医学―住吉仙也

○登山と気象―宮内

○遭難対策―編纂室

○海外の山―田中栄蔵

○随想―加藤泰安もしくは村山雅美

○山の植物―山下一夫

○日本山岳会について―松田雄一調査記事、山小屋一覽、登山行程表その他。

山小屋一覽について山岳会指定の山小屋をつくり、施設向上の刺激とし、又会員の利用上の特典を考えてはどうか、及び、山岳会会員名簿を末尾に印刷してはどうかとの提案があった。後者については会員同志の横のつながりが強くなり、利用上も便利であり、会員名簿を別に印刷する経費の節減になるなどの利点がある

げられ、欠点としては山日記購入者の大半は会員でない現状にのみならず、一般購入者が奇異、反感を抱きたくないか、名簿が不当に利用される恐れはないか、など多くの意見が出された。結局、別刷りにして挟みこむか、その扱いは会員名簿編集委員会(担当丹部理事)に検討をゆだねることになった。

指定山小屋については支部長会議を開き、各地方支部長と連絡をとりながら特別の委員会を設けて慎重に研究することとし、深田理事が担当することとした。

委員―坂本矩祥、水野弥彦、鹿野勝彦、担当理事―大貫良夫。

⑦会報編集委員会

当面の目標として会報「山」をなるべく早く第三種郵便物にするように努力するとともに、原稿執筆依頼を六ヶ月位先から、種類、字数など指定して依頼する。また会員通信は字数を制限して多くのせる。

委員―吉沢一郎、松田雄一、宮下秀樹、小方全弘、竹内通雄、坂本矩祥担当理事―酒井敏明。

⑧海外連絡委員会

昨年に引き続き各国山岳団体との連絡を緊密にとる。在日外国人登山家との交歓や来日する外国人登山家のお世話を(旅行会社では出来ない面)でする。

委員―日高信六郎(顧問) 三田幸夫(長) 近藤等、牧野文子、丹部節雄、吉沢一郎、芳野越夫、鈴木郭之、深田久弥、松田雄一、田村俊介、山口節子、小味秀純、堀川英司郎、平山善吉、担当理事―関口周也。

⑨学生部委員会

学生山岳部の活動が自主的に行なわれるよう、に補佐する。日本学生山岳連盟を設立するよう努力する。これに関し現在各学校に手紙を出しその回答を待っている。すでに三十通返事がきている。

委員―村木潤次郎(長) 広谷光一郎 平山善吉、住吉仙也、藤井運平、栗林一路、浜野吉生、牧野内昭武、神崎忠男、中川武、錦織英夫、磯野須彦、担当理事―宮下秀樹、竹田寛次

⑩神河内山荘運営委員会

人を泊めて恥しくない小屋に改造することを課題としている。今年はそのための準備期間にする。

委員―高山忠四郎(長) 折井健一、小里頼忠、塚本茂樹、村上守、石原憲治、丹部節雄、平山善吉、西丸震哉、担当理事―飯野亭。

⑪ルーム担当委員会

ルームの整備、利用に万全を期する。委員―深田久弥、松田雄一、大塚博美、飯野亭、平山善吉、関口周也、担当理事―宮下秀樹。

⑫山岳編集委員会

「山岳」第六二年は従来通りの体裁とし、内容はアンケートなどにより会員の意見を反映させたく、国内の山に関する記録、研究を配慮したい。ページ数は三〇〇ページ前後、一九六八年三月二十日発行を予定している。

委員―望月達夫(長) 村木潤次郎、松田雄一、竹田寛次、丹部節雄、平山善吉、担当理事―中島寛。

⑬図書委員会

新ルームでスペースも広くなるので蔵書一〇、〇〇冊を目標に整備する。収納用にコンバックを備える。委員―深田久弥、小林義正、山崎安治、石坂昭二、初見一雄、大橋晋治、中島寛、村山善吉、野上成男、担当理事―平山善吉。

情報収集とすみやかな対策を検討実施するため少数にして強力な委員会活動する。

委員―日高信六郎(顧問) 松方三郎(顧問) 石原憲治、村井米子、坂倉登喜子、今井雄二、島田興、伊藤秀五郎、川森左智子、担当理事―渡辺公平。

(2) ルーム移転に関する件……飯野

改装委員会によって改装のプランはほぼ纏った。約一〇〇万円の予算で六月三日頃から岩下建設の手によって着手される。六月十八日に第一回移転で残りを運び移転を完了する。そのため六月十日頃から荷造りを開始する。運ばない備品、その他についても処分方法は決まっている。

ルームの契約は五年毎に更新することとし、契約書にはルームを第三者に実費をもって貸すことも入れることにした。

(3) ルーム基金の募金に関する件……飯野

五月十九日に募金常任委員会を開いた。依頼先によつては委員が署名した添書を同封して依頼状を送付する。募金目標額は八〇〇万円である。理事・評議員は原則として一〇口以上お願いしたい。

(4) 実行予算案検討の件……飯野

各委員会担当理事から実行予算案が提出されたが、大部分は先の予算案の枠内に収まるものである。通信費は会報が第三種郵便の扱いになれば少しうかが予算には従来通り計上する。未提出の分もあるため次回の常務理事会にかけて最終案を七月の理事・評議員会に提出する。大幅の変更はない見込みである。

(5) 支部長会議開催の件……辰沼

ルーム基金の募金、山小屋指定、会員名簿、新役員紹介、各支部からの報告事項などを議題として早急に開きた

い。特に募金については急を要するので、本部から二、三の支部への出張、電話連絡に振替えなどの提案もあったが、結局、次のように決定した。

日時※ 七月十五日(土) 午後二時。場所 新ルーム。※ 理事会では六月十七日と決定されたが、諸種の事情から常務理事会で七月十五日に変更された。

(6) その他の報告事項

①日本山岳協会 辰沼、大塚 五月二十七日・八の両日、全国理事会、評議員会、法人設立総会があり社団法人にするため新しい定款がつくられた。武田久吉会長が勇退され新役員として、会長、榎有恒、副会長松方三郎、同尾岡広の三氏が推挙され、総会に於て選任された。常務理事は十名の中、本会会員より加藤泰安、辰沼広吉、星野重、高橋定昌、大塚博美、松田雄一の六名が選任された。

②シエラクラブの大学来日登山の件 ……関口

今年下見、来年下交渉に数名来日し、一九六九年に二〇名くらいが来日する計画である。原則として旅行社にまかして、登山についてのみ相談にのるということにしたい。

③オーストリアのアドルフ・ディーンベルガーから「山岳」の記事、地図その他を利用して欲しいと依頼があった件……吉沢

「山岳」による「クレンジット」を明記すれば差支えないと承認された

④指導員に関する件……飯野

都岳連事務局に保留してある旨報告があった。

⑤地図購入の件……飯野

丸善の展示会に出品されている地図一揃いをルーム用に購入する。そのために地図専用のケースも新に購入することを考えている。

⑥自然保護委員会

⑦学生部委員会

⑧海外連絡委員会

⑨遭難対策―編纂室

情報収集とすみやかな対策を検討実施するため少数にして強力な委員会活動する。

委員―日高信六郎(顧問) 松方三郎(顧問) 石原憲治、村井米子、坂倉登喜子、今井雄二、島田興、伊藤秀五郎、川森左智子、担当理事―渡辺公平。

(2) ルーム移転に関する件……飯野

改装委員会によって改装のプランはほぼ纏った。約一〇〇万円の予算で六月三日頃から岩下建設の手によって着手される。六月十八日に第一回移転で残りを運び移転を完了する。そのため六月十日頃から荷造りを開始する。運ばない備品、その他についても処分方法は決まっている。

ルームの契約は五年毎に更新することとし、契約書にはルームを第三者に実費をもって貸すことも入れることにした。

(3) ルーム基金の募金に関する件……飯野

五月十九日に募金常任委員会を開いた。依頼先によつては委員が署名した添書を同封して依頼状を送付する。募金目標額は八〇〇万円である。理事・評議員は原則として一〇口以上お願いしたい。

(4) 実行予算案検討の件……飯野

各委員会担当理事から実行予算案が提出されたが、大部分は先の予算案の枠内に収まるものである。通信費は会報が第三種郵便の扱いになれば少しうかが予算には従来通り計上する。未提出の分もあるため次回の常務理事会にかけて最終案を七月の理事・評議員会に提出する。大幅の変更はない見込みである。

(5) 支部長会議開催の件……辰沼

ルーム基金の募金、山小屋指定、会員名簿、新役員紹介、各支部からの報告事項などを議題として早急に開きた

い。特に募金については急を要するので、本部から二、三の支部への出張、電話連絡に振替えなどの提案もあったが、結局、次のように決定した。

日時※ 七月十五日(土) 午後二時。場所 新ルーム。※ 理事会では六月十七日と決定されたが、諸種の事情から常務理事会で七月十五日に変更された。

(6) その他の報告事項

①日本山岳協会 辰沼、大塚 五月二十七日・八の両日、全国理事会、評議員会、法人設立総会があり社団法人にするため新しい定款がつくられた。武田久吉会長が勇退され新役員として、会長、榎有恒、副会長松方三郎、同尾岡広の三氏が推挙され、総会に於て選任された。常務理事は十名の中、本会会員より加藤泰安、辰沼広吉、星野重、高橋定昌、大塚博美、松田雄一の六名が選任された。

②シエラクラブの大学来日登山の件 ……関口

今年下見、来年下交渉に数名来日し、一九六九年に二〇名くらいが来日する計画である。原則として旅行社にまかして、登山についてのみ相談にのるということにしたい。

③オーストリアのアドルフ・ディーンベルガーから「山岳」の記事、地図その他を利用して欲しいと依頼があった件……吉沢

「山岳」による「クレンジット」を明記すれば差支えないと承認された

④指導員に関する件……飯野

都岳連事務局に保留してある旨報告があった。

⑤地図購入の件……飯野

丸善の展示会に出品されている地図一揃いをルーム用に購入する。そのために地図専用のケースも新に購入することを考えている。

# ☆ルーム基金募金 状況について

新ルームへの移転は七月一日に完了し、三日からは各種集金が開始され、会員の訪問でにぎわっており、まずまずのスタートをきった。これから図書室も整備され、会員迎え入れの人的体制もとのうでルームらしいルームが期待できよう。

一方、六月一日から始まった募金も七月五日現在で五二五名二、八一三口（貳百八拾壹萬三千円）のお申込みをいただいている。これは会員（会費納入）数の四分の一、目標額の三分の一に当るが、この現状からして募金の方はこれからといった状況にある。

申込は一応六月末としたがこの状況からして、八月頃まで延長し、払込の分割方式等も考えて、会員一人一人に呼びかける方式をもって、きめこまく目標達成を図って行かないことには、移転したが支払ができない状況にもなりかねない。ここでまだお申込みをいただけない会員に、是非ともお申込みをいただくともに、新ルームも是非みて、そして活用していただきたいと考える次第である。

移転のため事務が遅滞し、お申込みをいただいた会員方にまだお礼も申し上げていないが、深くお詫びするとともに厚くお礼申し上げる次第である。こうした募金事務の遅滞をなくし、更にきめこまかい募金事務を促進するため、七、八の二ヵ月、事務アルバイトを雇うことにし、東京女子大生石本朝子さんが八日から勤務している。

最後にまだお申込みをいただけない会員の方はとりあえず申込みだけでもしていただくようお願いして経過報告にかえたい。

ルーム基金募金委員会



## ルーム日誌（42年5月）

- 10日（水）常務理事会
- 11日（木）定例理事評議員会
- 15日（月）学生部委員会
- 19日（金）海外連絡委員会
- 24日（水）婦人部
- 25日（木）常務理事会
- 学生部委員会
- 30日（火）ルーム移転実行委員会
- 31日（水）学生部委員会

## お願い

総会通知に同封してお願した、会員名簿用の葉書をまだ返送されていない方は至急お送り下さる様お願い致します。（会員名簿編集係）

× × × × × ×

# 一九六七年度国際 アルビニスト集会

海外連絡委員会

本年七月シヤモニにて開催される国際アルビニスト集会には本会より左記二名を推薦することになりましたので御紹介致します。

## ◆

・植村直巳(会員番号五七二六番)  
明大OB、一九六五年ゴジニバカン登頂者、その後六六年キリマンジャロ、マッターホルン等アルプスの諸峰に登る。現在フランス、モルツィネ在住。  
・伊藤頼司(会員番号六二六六番)  
明大OB、昭和四十年度チーフリーダーとして活躍。

## 「山」広告掲載

20000のお願い

「山」の広告料金が左記の様に改正になりました。会員各位におかれましては関係先を是非御紹介下さる様お願い致します。尚広告申込用紙は会の事務所に備えてありますので御一報下さい。(会報担当理事)

## 記

### 一、広告掲載条件

○凸版を使用するものについては、原則として、一ヶ年(十二回)以上の契約とする。

○凸版を使用しないものについては一回限りの契約にても可

### 二、広告料金(年間契約)(月決)

1/10頁 20,000円 2,000円  
1/5頁 30,000円 3,000円  
2/5頁 50,000円 7,000円  
3/5頁 75,000円 10,000円  
1頁 120,000円 15,000円

○広告料金は毎月掲載誌と共に請求致します。

## 二水懇親会仮世話人

前号にスペースがなくなつてしまつたので、ここに改めて右世話人の氏名をお知らせします。

一四二 日高信六郎  
一七五 折井 健一  
一八五 網蔵 志郎  
一八五 石原 憲治  
一九四 錦織 保清  
二一八 村倉寛二郎  
三〇一 村井 義哉  
三〇五 西丸 震哉  
三五〇 安彦 六郎  
三七七 野田 三郎  
四六七 鈴木 郭之  
四七二 中 保  
五四三 小 秀純  
五五〇 堀川英司郎  
五六〇 六

## 編集後記

☆前号では再校中に飛び込んで来た原稿があったので編集後記が押し出されてしまった。☆表紙のレイアウトについては、欄外の年月を含めて、皆さんから沢山の優れたご意見を頂くことが出来、厚く御礼申し上げます。結局、前号、前号のものが皆さんの賛同を得ましたし、編集者としても、目次を横にした方が窮屈でないで、この形式にきめたいと思います。☆カットについて申上げると、前には加納一郎氏、牧野文子氏、小野幸氏その他の方々から立派なものを送り頂いたが、この度、山岳画家で会員の山里寿男氏が、欧州で画いて来られた素晴らしい山のカットを特に「山」用にと七枚も送って来て下さった。何とも感謝の言葉がなれたもの、個人の展覧を、この八月に銀座

の松屋で開かれる由である。☆この頃は裏方の努力で広告が大部入るようになった。嬉しい限りである。媒体としてもそう卑下したのではないので、今後とも大いにすすめて頂きたい。☆会報委員が最終的に決定したらこの欄でご紹介しておくことにする。最近会報委員二人に前後して赤ちゃんが生れた。善哉々々。(吉沢一郎)

昭和四十二年七月十日発行

東京都千代田区神田錦町  
三二二 向井ビル  
発行所 社団法人 日本山岳会  
編集代表 吉沢 一郎

頒価五十円 (293) 七四四一  
振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂  
東京都港区赤坂一丁目三番六号

あなたのネガから パネル張り

# 山岳写真を

ありし日の、苦闘と歓喜をいまここに

## 35mmからすばらしい迫力!

あなたのネガから、明快なコントラストと適切なトリミングで、大型・美麗・パネル張り写真を製作いたします。ネガと返送料150円同封でご注文下されば到着後1週間前後で製作発送いたします。

代金は着品後10日以内にご送金下されば結構です。なお代金前払いの方には送料は弊社で負担いたします。但し、ネガ不調のため作品にご満足頂けないと思われる場合には、ネガ、代金、返送料ともそのまま直ちに返送申し上げます。

お気軽にネガを送って下さい

### 白黒の部

■全紙半分.....パネル張り ¥ 1,200  
■全紙(新聞1ページ大).....パネル張り ¥ 1,600  
■全紙2倍.....パネル張り ¥ 4,000

### カラーの部(ネガ、カラーに限りです)

■四切.....パネル張り ¥ 1,500  
■半切.....パネル張り ¥ 3,000  
■全紙.....パネル張り ¥ 5,000

上記以外のサイズ、または同時に多数のご注文の際はご照会下さい。別にお見積申し上げます。

カタログ進呈



優れた技術とハイセンスの

本多写真

本多善博

名古屋市熱田局区内柴田西町1-16 TEL (611) 7047



ピー...相手をいつでも呼出せる!  
便利な「呼出装置付」  
CBT-65 現金正価19,500円・月賦正価20,500円(6回)

トランシーバーは

シャープ  
シャープ

早川電機